

注

- 1) “She had, indeed, given up her position as queen of the less to be vassal of the greater.” (*A Pair of Blue Eyes*, Papermac: The New Wessex Edition, 1986, p. 248) 以下、この作品からの引用は上記の版により、本文中に頁を示す。
- 2) *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (1971; Macmillan, 1994), p. 68.
- 3) “Introduction”, *A Pair of Blue Eyes* (Penguin Classics, 1986), pp. 18–19.
- 4) Millgate, *op. cit.*, pp. 68–69.
- 5) この時から一年後彼女はチェスの試合の後 Knight に対して ‘I am nearly twenty’ (p.140) と言っているが、1ヶ月後婚約した彼に “I fancy you thought me to mean I was twenty my next birthday, but it was my last I was twenty.” (p. 216) と弁明している。なお Knight は Elfride よりも12歳年上だが (217、234頁参照), Stephen は1ヶ月年下である。(89頁参照)。
- 6) *The Complete Poems of Thomas Hardy*, ed. James Gibson. The New Wessex Edition(London: Macmillan, 1976), p. 349.
- 7) “Introduction”, *A Pair of Blue Eyes* (Penguin Classics, 1986), p. 14.
- 8) F.B.Pinion, *A Hardy Companion* (Macmillan, 1974), p. 24.
- 9) Rosemary Sumner は Knight の姿勢について、それは “the outward manifestation of his inner, inhibited and self-centred personality” だと述べている (*Thomas Hardy: Psychological Novelist*, Macmillan, 1986, p. 122)。
- 10) Elfride による「過去」の否定については、*The Mill on the Floss* (1860) の Maggie Tulliver による「過去」の肯定との比較を通して、土屋倭子氏が「トマス・ハーディの『青い眼』——ヒロインにみる「過去」の意味——」において論じておられる (『津田塾大学紀要』1986, vol.18, pp. 25–37)。
- 11) Alec との関係を告白した Tess に “the woman I have been loving is not you” と告げて許そうとしない Angel の頑くなさは “a hard logical deposit, like a vein of metal in a soft loam, which turned the edge of everything that attempted to traverse it” と言及されている (*Tess of the d’Urbervilles*, O.U.P.:World’s Classics, 1988, p. 237, CH. XXXVI)。
- 12) Roger Ebbatson, “Introduction”, p. 23.
- 13) Ronald Blythe, “Introduction”, *A Pair of Blue Eyes* (Papermac : The New Wessex Edition, 1986), p.xxv.

ていく。彼の愛を失うことを恐れて初めにすべてのことを告白しなかった Elfride の苦悩は理解されることはない。彼への一途な思いは Elfride にこう言わせている — ‘I didn’t wish to know about it [your past]. All I cared for was that, wherever you came from, whatever you had done, whoever you had loved, you were mine at last’ (p. 258)。¹⁰⁾ しかし32歳の今まで母と Elfride 以外の女性とキスをしたことのない Knight は、自分と同じように “unpractised” な女性を求めている、Elfride を “an unseen flower” (p. 236) と理想化していただけに自分より先に彼女が愛した人がいたことが許せないのである。しかも秘密結婚をしようとロンドンまで出かけて翌日帰ってきたことで、道徳的に清らかであることを第一とする Knight は、“good name” に対する配慮など構わずにロンドンまで追いかけてきた彼女を拒否する。

インテリの Knight が体现している精神的硬直性について語り手はこう述べている。

The moral rightness of this man’s life was worthy of all praise; but in spite of some intellectual acumen, Knight had in him a modicum of that wrongheadedness which is mostly found in scrupulously honest people. With him, truth seemed too clean and pure an abstraction to be so hopelessly churned in with error as practical persons find it. Having now seen himself mistaken in supposing Elfride to be peerless, nothing on earth could make him believe she was not so very bad after all. (p. 276)

Knight は、Tess の愛を許容できずに彼女を死へ追いつめた Angel を思い出させる。¹¹⁾ 彼は、20年間生きてきた Elfride 自身の生が培った “independent sexual identity”¹²⁾ を認める勇気がなかったのである。自分の観念が拵え上げた女性像に合致しない彼女を拒否する彼が最も恐れたのは、Angel の場合と同じく、彼の鋳型からはみ出すにことのできるヒロインの “capability to love”¹³⁾ だったのではないだろうか。Elfride はそれほどまでに自ら愛することのできる女性に変っていたのである。

りかゝった Knight に Elfride を婚約者として紹介されたのであった。相手を思いやる心は Knight よりすぐれていた Stephen は Elfride との仲を口にすることはしなかった — “His old sense of indebtedness to Knight had never wholly forsaken him; his love for Elfride was generous now.” (p. 209)。そして同じ納骨堂に収められることになった Elfride の死因は直接的には流産であるが、それだけではなかった。

Knight を追ってロンドンへ出かけた Elfride は父親によって Endelstow に連れ戻されたが、それから Luxellian 卿との結婚にいたるまでの彼女の状況は、彼女の女中だった Unity によって Stephen と Knight に語られる。Elfride を “my dear Miss Elfie” と呼び、彼女と同じ日に結婚式を挙げるほど彼女のことを案じていた Unity によれば、落ち込んでいた Elfie も挙式の一ヶ月前には 2 人の子供や男爵と一緒に乗馬を楽しんだり、優しい男爵からの宝石やバラの花の贈物に少し元気になったようであったが、結婚して間もなく彼女の生きる力は衰えていった、というのである。Knight との別れで受けた心の傷から立ち直ることができなかつたのである。

Knight は Stephen ほど異性に対して寛容な心を持っていない。Stephen が Elfride から Felix のことを告げられたのは、この死亡した青年の “flat tomb” (p. 55) の上に二人が腰をおろして、Stephen が両親の身元を打ち明けた後のことであるが、‘He was before me’ (p. 59) と「(自分)より前に」を強く言って機嫌を損ねるものの彼女を責めることはしていない。しかし、同じ場所での Knight への告白の場合、二年前の Felix、一年前の Stephen と、二人のことを話さなければいけないという二重の重荷を彼女は背負っているのだ。Casterbridge の市長 Henchard や d’Urbervilles 家の Tess の場合ほど強烈ではないにしても、やはり過去がネメシスとして Elfride に取りついている。

Knight は自分が “the first comer in a woman’s heart” (pp. 151, 247) であることを重要視している。つまり相手の女性が純真無垢であることを理想としていて、Elfride にキスをし結婚まで約束した男がいたと知って衝撃を受け、“we shall never be happy” (p. 256) と口にする。このような Knight の受け取り方は、Pinion のことばを借りれば、“Victorian perfectionism and rigidity” の表れとみることができようが、⁸⁾そこには、彼の人生とは異なる Elfride の歩いた人生もあったことを思いやる寛容さがない。尺度は自分の考え方だけであり、しかもそれが道徳的に絶対正しいと信じているだけに、彼女を問い詰めることをやめない。⁹⁾その相手の男性と墓にいる男が別人で、墓の上で愛のことばを交わしたことを彼女が正直に告げると愕然とし、純白な彼女に “charm” を夢みていた Knight は自分が “ill-luck” なのだとシニカルになっ

されるのは、皮肉にも先の蒸気船で一時帰郷した Stephen の目を通してのことである。インドへ出かけてからほぼ 1 年ぶりに帰英した彼はブリストルから Castle Boterel の港に着く。その明るい静かな 9 月の夕方、彼女の家の側を通過して両親の家へ帰ろうと波止場をうろついていた彼はボート遊びをしているアベックに気づくのだ。二人をこっそりつけた Stephen はあずまやで語り合う Elfride と Knight をのぞき見する。そして自分を精神的に支配していた彼女が今やすっかり Knight に恋い焦がれているのを目撃するのだ。

Stephen could tell by her manner, brief as had been his observation of it, and by her words, few as they were, that her position was far different with Knight. That she looked up at and adored her new lover from below his pedestal, was even more perceptible than that she had smiled down upon Stephen from a height above him. (p. 195)

実は二人を盗み見していた Stephen は、Elfride への復讐の機会を狙って彼女をつけ廻す Felix の母 Jethway 夫人に見られていた。Roger Ebbatson は、この小説を“a drama of perception and identity”と述べ、そこに用いられている描き方の一つとして“conjunctions of observer and observed”を挙げているが、⁷⁾ 上述の出来事はその好例の一つといえる。

傷心の Stephen は再びインドへ行き、そこで宮殿や病院、学校の設計をまかせられるほどの大成功をおさめて 1 年半後の 2 月に英国に戻ってくる。そして Knight とハイド・パークで遭遇するが、Knight も Elfride と 10 月に別れて 1 年 5 ヶ月ぶりにヨーロッパ大陸から帰ったばかりであった。この再会は 2 月 12 日のことで、Stephen は英国に戻ってまだ 2 日間と云っているので 2 月 11 日に帰英したと思われる。そして二人は翌日、つまり聖ヴァレンタイン祭の前日の 13 日、Elfride の愛を再び求めて Endelstow めざして汽車に乗るのだが、同じ汽車で 2 月 10 日に死亡した Luxellian 男爵夫人の Elfride の棺が運ばれていたのである。

(5)

Elfride は Knight に棄てられて丸一年後の 10 月、彼女を“little mamma”と慕う、Luxellian 男爵の二人の娘のために彼と結婚する。前の男爵夫人は、Stephen がインドから一時帰国して Elfride と Knight の仲良く語り合う姿を見た、約一年前の 9 月に亡くなっている。その折、彼女を埋葬するため教会の地下納骨堂を開く石工の父を手伝っていた Stephen は、奇しくも散歩中に通

であるが、Knight が救われた瞬間からの情景は次のように叙述されている。

He was saved, and by Elfride.

He extended his cramped limbs like an awakened sleeper, and sprang over the bank.

At sight of him she leapt to her feet with almost a shriek of joy. Knight's eyes met hers, and with supreme eloquence the glance of each told a long-concealed tale of emotion in that short half-moment. Moved by an impulse neither could resist they ran together and into each other's arms.

At the moment of embracing, Elfride's eyes involuntarily flashed towards the Puffin steamboat. It had doubled the point, and was no longer to be seen.

An overwhelming rush of exultation at having delivered the man she revered from one of the most terrible forms of death, shook the gentle girl to the centre of her soul. It merged in a defiance of duty to Stephen, and a total recklessness as to plighted faith. Every nerve of her will was now in entire subjection to her feeling — volition as a guiding power had forsaken her. To remain passive, as she remained now, encircled by his arms, was a sufficiently complete result — a glorious crown to all the years of her life. Perhaps he was only grateful, and did not love her. No matter: it was infinitely more to be even the slave of the greater than the queen of the less. Some such sensation as this, though it was not recognized as a finished thought, raced along the impressionable soul of Elfride.

(pp. 176—77. 下線部は筆者)

二人は目が合った瞬間、互いに相手を思っていたことを悟り衝動的に駆け寄って抱き合う。その時彼女の目は沖合を通る Puffin 号を捉える。彼女はその船には自分に会いに来る Stephen が乗っているのを知っているのだが、Knight に腕をまわされた歓喜で前者への“duty”は忘れ去られ、彼女の“will”は後者に対する“feeling”に従い、Knight が自分を愛しようといまいと、彼の“slave”になることを彼女は選び取ったのである。

自分を田舎暮らしの生活から救い出してくれる騎士を受身的に待っていた Elfride が自ら積極的に Knight を“admire”し愛するという姿がはっきり観察

1年を経た、やはり8月のことである。

Elfride と Stephen 及び Knight との知的・精神的な力関係はそれぞれチェスの試合を通してパラレルに描かれていたことは既に触れたが、Knight の場合、Elfride と会う前に彼女の作品を書評で酷評しているのだから、彼が知的にはすでに優位に立っていることは明らかであった。そのうえ更に、チェスの勝負を行う前に、教会の塔で手摺壁の上を歩く向こう見ずな行為をする彼女を、Knight が叱るエピソードが挿入されている。

実は2月に Stephen と会った直後の出来事に丁度これとパラレルになっているものがある。Endelstow 教区の東半分と西半分とをつなぐ橋を渡る際に、全く必要ないのに Elfride が馬車から跳び下りるのだ。この時 Stephen は ‘Why, Miss Swancourt, what a risky thing to do!’ (p. 32) と感嘆の声を発し、彼女の例にならって自分も跳び下りる子供っぽい真似をしてしまう。しかし Knight は、彼女が手摺壁の上を歩き始めた時、その無謀さにあきれ「もっと常識のある人だと思っていた」と怒る。そしてバランスを失ってすべり落ちた彼女を跳んで抱きとめた時、‘That ever I should have met a woman fool enough to do a thing of that kind! Good God, you ought to be ashamed of yourself!’ (p. 129) と叱りつけるのである。父に甘やかされ、Felix や Stephen に姫君の如くかきつられて自分を省りみることのなかった Elfride が Knight によって変っていく第一歩がここに印されたのである。

塔の内側の鉛でできた屋根を2、3フィートすべって手首に傷を負った彼女は Knight に抱きかゝえられて階段を降りてゆくのだが、手首に巻いたハンカチを巻き直す彼を見る Elfride の表情は “from pained indifference to something like bashful interest” (p. 131) と変化する。彼に導かれて馬車に向かう時、彼女は自分が “a colt in a halt” のような気分になる。このあとすぐにチェスのゲームがあって Elfride はくやし涙を流すのだが、そんな自分が Knight の目にどんなに “small” に映っているかが気になり始める — ‘Ah, what a poor nobody I am! ... People like him, who go about the great world, don’t care in the least what I am like either in mood or feature.’ (p. 142)。そして彼の “respect” を得たいという気持は、 “an incipient yearning for his love” (p. 144) へと発展していく。そして海岸の断崖の岩棚から登り上れないでいる Knight を、彼女が下着類でこしらえたロープで救出するという出来事は、一気に憧れに似た彼女の思いを激しい愛へと変えていく。

この断崖でのほらはらする冒険は、*A Pair of Blue Eyes* で一等有名な場面

Elfrideにとって夏の8月はStephenに愛され、Knightを愛した時であったが、秋の10月は別れの時である。

(4)

ElfrideとStephenとの秘密結婚が不首尾に終わったと同じ時に、彼女の父Swancourt牧師はLuxellian卿に次ぐ大地主の未亡人Troyton夫人との秘密結婚に成功していた。この義母の進言でElfrideは中世の騎士物語のフィクションを著し出版することになる。彼女の願いは“(she) wished she could make a great fortune by writing romances, and marry him [Stephen] and live happily” (p. 99) とあるように、けなげと形容できるものではあったが、“rapture”はさめていたとして語り手はこう続けている。

Rapture is often cooled by contact with its cause, especially if under awkward conditions. And that last experience with Stephen had done anything but make him shine in her eyes. His very kindness in letting her return was his offence. Elfride had her sex's love of sheer force in a man, however ill-directed; and at that critical juncture in London Stephen's only chance of retaining the ascendancy over her that his face and not his parts had acquired for him, would have been by doing what, for one thing, he was too youthful to undertake — that was, dragging her by the wrist to the rails of some altar, and peremptorily marrying her. Decisive action is seen by appreciative minds to be frequently objectless, and sometimes fatal; but decision, however suicidal, has more charm for a woman than the most unequivocal Fabian success. (p. 100)

彼女を「女王」として精神的に上位に置き、優しく従うことを良しとしたStephenに決定的に欠けていたのは、彼女を強引に引っ張って行く強さであり、決断力であった、と述べられている。男性が自分より強くて優れた力——それが“ascendancy”にあたるのだろうが——を揮って、自分を高めてくれたり、未知の国へ連れて行ってくれる期待をElfrideが感じることはできたのはHenry Knightに対してであった。

KnightはElfrideの父Swancourtが再婚したTroyton夫人のいところあたり、彼女の招きで彼がそのマナー・ハウスを訪ねるのは、FelixがElfrideに恋した時から2年後、Stephenが牧師館を再訪して彼女とキスを交した時から

二人はプリマスの駅で会うが、Stephen が入手した結婚のライセンスはロンドンの彼の教区でしか使えないとわかって、二人はロンドン行き汽車に乗る。首都までの旅で Elfride の興奮が静まり、旅の後半彼女は “a kind of stupor” (p. 88) の状態にある。そしてパディングトンのプラットフォームに足をおろした瞬間、とてもみじめな気持ちになっているから家に帰りましょう、自分がぐらついているのを許して、と彼女は言って、二人はまたすぐにプリマス行き汽車に乗り込む。この時の Elfride の心理について直接の理由説明は何もなされていない。自分はすべてを捨てる程この人を愛しているのか、自分の運命をゆだねるだけの強力な値打ちがこの人にあるのか、自分は閉じ込められていたお城から連れ出されるお姫様というロマンティックな夢を見ていたのではないか、恐らくこのような苦い目覚めが彼女の頭をよぎったのではないだろうか。二人がコーンウォールに戻った時、彼女を妻として「所有」できる確信を持ち得ない Stephen の「憂うつ」に対して、Elfride の現実へのしたたかさはこう述べられている。

At length she came trotting round to him, in appearance much as on the romantic morning of their visit to the cliff, but shorn of the radiance which glistened about her then. However, her comparative immunity from further risk and trouble had considerably composed her. Elfride's capacity for being wounded was only surpassed by her capacity for healing, which rightly or wrongly is by some considered an index of transientness of feeling in general. (p. 92)

このロンドンへの汽車の旅は9月のことで、翌10月、Stephen は Elfride との結婚を実現するため一旗揚げようとインドへ出かける。その丁度1年後の10月、Elfride は自分を棄ててロンドンに戻った Knight をその部屋に訪ねるのである。初めて自分の方から捧げた愛であったがロンドンへの汽車の旅はやはり幸せをもたらしてはくれない。Hardy は “After a Journey” という詩において、今や “a voiceless ghost” と化した昔愛した女性との思い出をうたっているがその11行から13行は次のようになっている。

What have you now found to say of our past —

Scanned across the dark space wherein I have lacked?

Summer gave us sweets, but autumn wrought division?⁶⁾

meditatively. What a proud moment it was for Elfride then! She was ruling a heart with absolute despotism for the first time in her life.

Stephen stealthily pounced upon her hand.

'No; I won't, I won't!' she said intractably; 'and you shouldn't take me by surprise.'

There ensued a mild form of tussle for absolute possession of the much-coveted hand, in which the boisterousness of boy and girl was far more prominent than the dignity of man and woman. Then Pansy became restless. Elfride recovered her position and remembered herself. (p. 43)

貴女のためなら死んでもいい、と言われた Elfride は初めて異性を絶対的に支配している気持になるのだが、一年前に Felix に恋された時に比べ彼女は女であることをはるかに意識していたと推測できよう。それでも作者は、最後のパラグラフが明示しているように、二人に「男と女」でなく「少年と少女」のイメージを付与することによって、Elfride がまだ積極的な愛に目覚めてはいないことを暗示しているようだ。そのことはこの場面にすぐ続く彼女の初めてのキスにうかがえる。

Stephen が彼女の手にはキスした後、二人は海を見下す岩場で、壁に入り込んだ座席のような坐れる場所に来るが、そこで結婚を願う Stephen は 'Do you love me deeply, deeply?' ときくと、Elfride は 'No' と即座に答えてしまう。この否定に相手が傷つき押し黙ってしまうと、'I didn't mean to stop you quite' と同情してしまいキスをされることになる。自分を救い出してくれる王子を待っていた彼女は彼を失いたくなかったのである。自分から彼に思いを告げるほど愛しているのではないということ、作者は更に方角を利用しながらほのめかす個所がある。

Stephen が自分の父が石工の親方であることを告白したことで、Elfride は父親の牧師から彼との交際を禁じられ、Stephen は東のロンドンへ帰ることになるが、二人はプリマスで秘密結婚を挙げる計画を立てる。彼女はその決行の前日、9月のある夕方、夕陽に誘われて散歩にできかけるのだが、彼が待っている東のプリマスの方向を見ていない自分に気づいて自責の念をおぼえ振り返るものの、視線は結局下方の地面におちていく — "After looking westward for a considerable time she blamed herself for not looking eastward to where Stephen was, and turned round. Ultimately her eyes fell upon the ground" (p. 84)。

恐らく彼が自分をこゝから連れ出してくれるのを望んでいるのだ。言わば眠り姫として、王子様の来訪を待ちわびていたのである。

(3)

Stephen が Endelstow 教区牧師館を再び訪ねて Elfride と再会するのは8月で、次の日は雨、二人は既に触れたチェスを行い、そこで Stephen が愛の告白し、その次の日は馬に乗れない彼は歩いて、彼女は愛馬 Pansy に乗って Windy 岬へ散歩にでかけ、初めての口づけ、そして牧師の交際反対で秘密結婚のためのロンドン行きと二人の仲は急速に発展していく。二人の精神的な力関係はチェスの試合でわかるように Elfride が強いのだが、2月の初めての訪問の時から彼女が優位に立っていることを作者は二人の空間的位置関係で暗示していた。

Stephen が修復調査のため教会の中で測量やスケッチをしている時 Elfride がやってきて説教壇に上り、そこから彼を見下しながら父の説教の原稿は自分が書いているのだと告げる。Stephen は“clever”ですね、と感心するのだが、彼は視線を当然上に向けて (“staring up”), 彼女とことばを交している。この場面は第4章にでてくるが、作者が意図的にこの上下の位置関係を設定していると納得できるのは第19章にこれと平行な場面が描かれているからだ。およそ一年後、西日が差す窓の光をあびながら Knight が説教壇から聖書を朗読するのを Elfride が見上げてうっとり耳を傾けるシーンが導入されている。Stephen はロンドンにおいて Knight を知っていて、彼を自分の精神的・知的教師として尊敬しているのだが、Elfride が同じ立場に立ち、自分を見上げていた Stephen と同じ所に今度は自分自身を位置させ Knight に従うことになる。

Stephen が Elfride を女王のように自分の上位に置いているのは彼女の手にキスをする時にはっきりわかる。二人が Windy 岬へ出かけた折、Stephen は「貴女は誰れよりも自分にとって大切な人」だと言ってキスをねだる。彼女は、唇はいけないが手にキスはしてよいと乗馬用の手袋をしたまゝ手を出す但他的表情からそれは“a great treat”ではないと知って手袋をはずす。

‘There, then; I’ll take my glove off. Isn’t it a pretty white hand? Ah, you don’t want to kiss it, and you shall not now!’

‘If I do not, may I never kiss again, you severe Elfride! You know I think more of you than I can tell; that you are my queen. I would die for you, Elfride!’

A rapid red again filled her cheeks, and she looked at him

とのやりとりで大体わかる。Elfride は、彼が “gentle and nice” で好きだったし、自分が小馬から下りる時は他に若者たちがいても彼に馬をおさえて貰っていたことを認めているが、母親がキスまでさせておきながら、と責めるのに対しては、背後から Felix が寄ってきて抱きつきキスしようとしたので二度と会わないと言った、と釈明している。Elfride は、Stephen と Knight にそれぞれ告白する時、ためらい、あいまいな答え方をすることはあっても嘘はつかないから信用していいだろう。また Stephen のことを “gentle” で “docile” だから好きと口にしてしていることを考え合わせると、Stephen に対し「女王様」のように振舞っていることから Felix に対してもそうであったのだろうが、彼と結婚する気などないのに “encourage” していると受け取られかねない、デリカシイ欠如の行為があったのだろう。だが彼女のことはもっと同情的に考える余地はある。

Elfride は物語の冒頭から紹介されるがすぐに “She had lived all her life in retirement” (p. 1) という文があり、父が聖職者であることから田舎暮らしが多かったのであろうし、また Stephen の母と話したことがない、という告白から、父が働いたどの教区でも自分から村の人たちと付き合うために近づいていくことはなかったのだと判断できる。だから「社会的意識」が町の15歳の女の子程度のものであったのである。彼女は中世の騎士物語の類のフィクションを自分で著すほど中世の宮廷を題材にしたロマンスものに夢中になって、騎士から求愛される貴婦人を夢みていた筈だ。父の反対で Stephen と離れ離れにならざるを得なくなった時、その行為が “proper” かどうかと考えることもせず、真夜中に旅立つ支度をしている彼の部屋のドアを叩く。“the tragedy of her life was beginning” (p. 74) と感じる彼女は、自分を悲劇のヒロインと読み込み始めたのだ。

この時 Stephen は、「しばらくすれば」(some time hence) 自分が成功して名と財を成し、Swancourt 牧師は二人の結婚を許してくれるのではないかとなだめるが、Elfride は次のように不安を訴える。

‘But you say “some time hence”, as if it were no time. To you, among bustle and excitement, it will be comparatively a short time, perhaps; O, to me, it will be its real length trebled! Every summer will be a year—autumn a year—winter a year! O Stephen! and you may forget me!’ (p. 74)

田舎でさみしく暮らす彼女にとって時間は何倍も遅く進んでいるのであって、

お目にかかれないかもと、Elfrideに‘Certain circumstances in connection with me make it undersirable. Not on my account; on yours.’ (p. 34)と告げる。しかし田舎暮らしの彼女は中世騎士物語を読み耽って空想力をかきたてて孤立した生活の空白を埋めており、彼に謎めいた秘密があることで、「男だわ、この人は」とロマンスを読み込むのだ。半年後の8月、再び彼が訪れチェスの後二人で海岸へ出かけた時、‘you are queen. I would die for you, Elfride!’ (p. 43)とささやかれると、キスを許してしまう程恋する心構えができていたのである。

二人が初めて会った2月21日の夜Elfrideは、Shelleyの抒情詩に今は亡き母が曲をつけた歌を、「私はほんとうに聴きたい人に歌ってあげたいの」と言ってStephenにきかせる。この冬の夜のことは第一章の一頁に“The point in Elfride Swancourt’s life at which a deeper current may be said to have permanently set in”と言及されていて、恋する時が訪れようとしていることを彼女は感じた筈である。しかし実は皮肉にも、このStephenが到着した当日は、一年前に彼女に恋し、ふられ、憔悴して死んだ“farmer”のFelix Jethwayが埋葬された日でもあった。

Hardyは物語中の出来事の日時を、語り手を通してわかり易く明示してくれないことがよくある。教区牧師が何時Endelstowに赴任して来たのかについてそれがいえる。一頁の10行目をすぎたあたりに“*She [Elfride] had lived all her life in retirement ... she was no further on in social consciousness than an urban young lady of fifteen.*”という文があって、汽車の駅まで15マイルもあるこの田舎に随分と長いのかとってしまうが、第2章では駅から馬車で牧師館に向うStephenの質問に対して御者が、「赴任して1年か1年半、2年にはならない」(6頁)と答えている。8月に再訪してElfrideとの結婚を考えるStephenが両親の身元を彼女に打ち明けると、「あなたのお母さまには口をきいたことないわ、こちらに来てまだ18ヶ月だから」(58頁)という答えが返ってくる。逆算すれば前の年の2月からこの村に住むようになったのである。そして1年後の2月にStephenの一回目の訪問がなされたのである。その6ヶ月後8月の2人のやりとりの時、Elfrideは自分に恋し結婚を望んだ男がいたことをStephenに告白する。それは1年前の8月のことで更に‘He died of consumption, and was buried the day you first came’ (p. 59)と告げる。作者Hardyは1年のサイクルで出来事を設定していることが窺える。

このFelixという農夫の青年とElfrideとの仲がどの程度親しかったのかは、彼女に事実上息子Felixを殺されたと思いついでいるJethway夫人とElfride

ける墓やイヤリングなどについては“systematic manipulation”と断言することをためらっている。⁴⁾

上記の二人の批評家が触れているチェスの試合の様子を少し述べると、Elfride は Stephen を相手にした時、戦い方の本は読んではいないものの実戦は初めての彼に対してわざと手加減をする。Stephen はそれに気づいて ‘Ah, you are cleverer than I. You can do everything – I can do nothing!...I must tell you how I love you! All these months of my absence I have worshipped you.’ (p. 39) と言って彼女を抱きすくめようとするが、精神的・知的優位性を感じる彼女は「そんなマネをしてはいけません」と“coquettish hauteur”で軽くかわす。このゲームの正確な日付は記されていないが8月に行われている。次の Knight との勝負では有利にゲームを進めていくものの最後に逆転負けを喫し、夜明けまでチェスの本を読んで翌日再挑戦するが再び敗れ、涙どころか熱まで出して寝込んでしまう。しかし次の朝彼と会った時、“Elfride was at once exultant and abashed: coming into his presence had upon her the effect of entering a cathedral.” (p. 137) と述べられるように、彼女はしおらしくなり、大聖堂に入った時の厳かさの比喻を通して、Knight を敬うようになることが暗示されている。

この Knight との試合が行われるのは8月7日、8日のことで、Stephen のそれと、丸一年の間隔がある。Hardy はパラレルな状況を導入する時、変化を際立たせるために、二つの事柄の時間関係にかなりの注意を払っていたようで、この点に注目しながら Elfride の変容を辿ってみたい。

(2)

ロンドンの建築家 Hewby 氏の命令で助手の Stephen Smith が West Endelstow の牧師館に到着するのは、教区牧師に宛てた Hewby 氏の手紙から2月21日のことであることがわかる(第2章9頁参照)。Stephen は20歳になったばかりで、Elfride のことばを借りると“pretty”な青年だが、そのミドルネームが“gentry”のある将軍と同じ名の Fitzmaurice であることから、Swancourt 牧師は彼を古い家柄の出身と勝手に思い込み、娘 Elfie との接近が容易になるように気を使ってくれる。痛風の父親に代ってホステス役を務める娘の方もこの都会からきた同年令の青年に対し、⁵⁾ “high tea”を用意したり、歌を歌ったりで、二人は親しくなっていく。

Stephen は、実のところ、Endelstow の大地主 Luxellian 男爵の石工 Smith の息子で、身分の低い素性がわかると牧師父娘に軽蔑されるのではと恐れている。ロンドンに戻る時に、8月にまた訪ねて来なさいとの招待に対して二度と

A Pair of Blue Eyes における ハーディの時間操作とヒロイン

吉 田 徹 夫

(1)

第三作 *A Pair of Blue Eyes* (1873) において Thomas Hardy は、同じ年令20歳の建築家の卵に賛美・崇拜され愛を授けてあげると、お高く振舞う教区牧師の娘が、彼女から離れていこうとする12歳年上の Oxford 出身の弁護士を追ってロンドンの彼の部屋を訪ね、召使いでもいいから傍に居させてくれと懇願する女へと変容していく姿を描いた。本文中からの語を借りると“queen”から“vassal”への変化である。¹⁾ *Desperate Remedies* (1871) の Cytherea Graye, *Under the Greenwood Tree* (1872) の Fancy Day が共に世間のうるさい目や口、「常識」にかなりの気遣いを示したのに比べ、Swancourt 牧師の娘 Elfride には愛への激しい一途さが見られる。

このヒロインの変身を描くのに Hardy が駆使した技法について、Michael Millgate は、ずばり、“Parallelism is the basic structural technique throughout”と述べている。²⁾ また Roger Ebbatson もこの作品の“careful planning and structure”を証するものとして“daring parallelism”を挙げ、その好例として Elfride が、教会修復工事の下調べに訪れた Stephen Smith と、父の後添いの義母を訪ねてきた法廷弁護士で文筆も手がける Henry Knight とをそれぞれ相手に行うチェスの試合に言及して、それが彼女と二人の男性との間の精神的関係を表しているとし、更に“the two contests also embody patterns of evolution and annihilation which are exposed throughout the action”と鋭い指摘をしている。³⁾ Millgate も当然のことながらこのチェスゲームに触れ、“at once an image and an actual battleground of sexual contest”を示す適切な「劇的仕組み」として有効な働きをしていることは認めているものの、Ebbatson が評価している、他のパラレルな場面にお